

若子の病氣

『北京孔徳学校旬刊』の第二期は四月十一日に発行され、児童の作品が二篇載っていて、そのうちの一つはわたしの娘が書いたものだ。

「夕方のお月さん」 周若子

夕方のお月さんは、大きくて明るい。わたしの二人の弟は言った。「お月さんに降りて来てもらい、ぼくらを抱っこして天まで遊びに連れてってもらお。お月さんが贈物くれたら、とてもうれしい。家に持って帰ってお母さんにあげよ、お母さんもきつとうれしかろ。」

しかしこの旬刊が郵便局から配達された時、若子はもう死ななばかりの状態にあった。その母は畳の上に拵げられた雑誌を眺め又昏睡の病人を見て、もう言うべき言葉もなく、わたしにしまわせただけだった、——これからも決して眼にすることのない記念品として。わたしはこの小文を読んで、思わずふと六歳の時に死んだ四番目の弟椿寿のことを思い出した。彼は急性肺炎になる二三日前、やはりしきりに女中に天上のことを訊いていた。わたし自身はそれはすべて迷信だということを知っているが、背筋に冷たいものが走るのを禁じえなかった。

十一日の夜中、彼女は熱を出し、それに続いてひどく吐いた。あいにく小児用の摂氏の体温計は小波波（わたしの兄弟の子ども）に壊されていたので、土歩君がちょうど二度目の種痘していて、華氏の体温計を応用したのだが、われわれの部屋には体温換算表がなく、熱を測ることができなかった。夜明け方になって隣の部屋から表を持って来て測ってみると、四十度三分もあった。八時ごろ^{ひきつけ}痙攣を起し、妻は彼女を抱いて、“お玉が変だ、お玉が変だ！”と叫ぶばかり。弟の妻（つまり妻の三番目の妹）が外へ行ってその弟をたたき起し、“お玉が死んだ！”と言ったものだから、彼はびっくりして思わずベッドから落ちた。その時にはもう医者が来ていて、診察の結果は“流行性脳脊髄膜炎”が疑われる、症状は全部揃っているわけではないけれども、要するに脳の故障で、とても危険であるということだった。十二時又ひきつけ、今度は脳の方はまだその次で、心臓が黴菌の毒に中って非常に衰弱していて、血行不良を来たし、皮膚に黒ずみが現われ、腕を押すと、へこんだ白色痕がなかなか回復しない。その日一日、院長の山本博士、助手の蒲君、看護婦の永井君、白君が先後してやって来、山本先生は自分から四度も来、永井君はわが家に泊り込み、看病を助けた。最初の日には混乱のうちに過ぎ、次の日病人は悪くはならなかったけれど、一昼夜以来二時間に一度の樟脳注射が少しの効き目もなく、心臓はまだ衰弱していた。熱はすでに三八度から三九度のあいだまでになっていたけれども。その日の午後、病人がコア餡を食べたいと言うので、わたしは哈達門〔前門〕まで買いに走り、途中しょっちゅう不吉な幻想に襲われ、まっすぐ家に帰って何の動静もないのを見てほっとしたのであった。三日目は火曜日で、無理して学校に行ったが、午後三時半ちょうど授業に出ようとした時、家から電話があり呼んでいるというので、急いで休みにして帰って来た。幸い今度は囁言だけで、別に何の変化もなかった。夜中の十二時に山本先生は診察後、はじめて生命に別条はないと宣言された。十二日以来、二度の食塩注射、三十度以上の樟脳注射を経、身体は大小七つの氷嚢を抱いて、七十二時間の末、なんとか死の国を離れたのは、ほんとうにとび切りの幸いであった。

山本先生は後で川島君に、あの日曜日、彼はもうだめだと思ったと言われた。たぶん二日目か、永井君も弟の妻の部屋で涙を流していたが、彼女もこの小さな友だちがなぜだかこの家庭を去ろうとしていると思ったのだろう。しかしこの病人がついに万死の中から逃れて一生を得たのは、どこから来た力かわからない。医療か、薬か、彼女自身のあるいは別の不可知の力か。だがわたしは知っている。もし医薬とみんなの助けがなかったならば、彼女はとっくにいなくなっていたろうことを。わたしがもし何かの宗派の信徒であれば、わたしの感謝には往く所があり、そして当初の恐怖はあるいは減らすことができたかもしれない。だがわたしはそうすることはできなかった。わたしは未知の力に対して時には驚異を感じながら、それでもまだ感謝を捧げようという深密な接触はなかった。わたしはいま感謝を捧げたいのは人であって自然ではない。わたしは山本先生と永井君の熱心な助けにとっても感謝している。わたしも四年前肋膜炎を治してくれた苦勞を忘れたことはないけれども。川島・斐君二君の毎日の心のこもった見舞にも、当然感謝しなければならない。

まるまる一週間眠って、脳はすでに次第によくなり、移動できるようになったので、それで十九日の午前中に病院に入院した。母と“姉さん”に付添われて。というのは心臓はまだ治療が必要で、病院に居れば何かと便利で、医者朝晩二度の往診の手間が省けたから。いま体温は元に戻り、脈搏も次第に回復し、彼女はかつてわたしが二ヵ月にわたって住んだ病室のベッドに臥し、ただ一つの氷枕によりかかり、一つの小さな氷嚢を胸に置いて、両手を伸ばし、そこで歌をうたっている。妻はわたしと相談して、若子の兄妹が十歳の時には、ともに十円ばかりを使って、使用人たちに分け与えそして何か物を食べて記念としたが、去年はそれだけのお金を出せなかったもので、そうしなかったが、今回は病気がよくなったら、何とかしてそのようにして併せて快気祝いをしなければと言った。彼女はその会話の意味を聴き取って、反対した。“そんなのよくないわ。もし今年十歳なら、来年はまだ十一歳じゃないの！”と。わたしたちはそれを聞いて思わず破顔一笑した。ああ、このちょっとした情景を、一週間前には夢にも想像できたろうか。

緊張しきった心は一時にはなかなかゆるまない。今日はすでに若子の病後の十一日目で、午後少し頭痛がするので休みの届けを出し家に居て、庭を散歩すると、白や赤の丁子の花はすでに真盛り、山桃は盛りをすぎて憔悴しはじめており、東側の道傍にエロシエンコ君がロシアに帰る前に記念に植えた一株の杏の花はすでに散り尽して、ただたくさんの緑の蒂が若葉の影に隠れているだけだった。春は去った。わたしたちがおびえおののいていた何日かのうちに、まるでいかげんに人を遇らうかのように北京の短い春はとっくにこっそりと過ぎ去った。わたしたちは今年がついに桃や杏の花をよく見なかったが、これは残念なことかもしれない。しかし花は来年もまた咲くし、春は来年もまたやって来るから、来年になって見ればよい。わたしたちは今年幸いにも別の一たび去ると二度と来ない春光を留めることができたのだ。それだけでももう十分満足である。

今日わたし自身こうしたものを書くことができたのは、わたしの乱れに乱れた頭もようやく落着いたということだ。これも愉快的事である。 民国十四年四月二十二日雨の夜。

※初出：1925年5月4日『語絲』第25期